

■日本燃焼学会創立50周年記念特集■

学会誌の変遷（「日本燃焼学会誌」）

東北大学流体科学研究所 小林 秀昭

学会誌は、専門知識や最新情報の提供、学会運営や講演会に関する広報など、会員に様々な情報を提供すると共に、会員の意識を相互に結びつける役割を果たしています。また、学会誌を受け取ることは会員としてのメリットであり、学会活動の重要な位置を占めています。日本燃焼研究会創立以来、会誌「燃焼研究」はその役割を果たしてきました。日本燃焼研究会は発展を遂げ1991年に日本燃焼学会へと飛躍しましたが、伝統ある「燃焼研究」の名称や体裁は維持されました。1993年に廣安博之編集委員長の下で表紙がカラー化され、原著論文の掲載が開始されました。その後も掲載記事等に幾多の工夫がなされましたが、学会法人化を睨んで、学会誌としての一層の充実が必要となってきました。このような背景から、2001年度編集委員会に学会誌の大幅な改革が付託され、検討が開始されました。新しい学会誌の検討と編集に最新情報機器の活用は不可欠であり、編集委員会の顔ぶれも若手中心となりました。当時の委員は、瀬川大資、中村直、野田進、長谷耕志、長谷川達也、古谷博秀の各氏で、私(小林秀昭)が委員長を務めました。新しい学会誌の検討にあたり方針として定めたのは、A4化と共に海外への情報発信も目指した和英編集であり、体裁の基本部分は必ず和英併記とすること、和英論文誌としての機能を強化することでした。そのため、歴史ある「燃焼研究」という誌名から決別し、「日本燃焼学会誌 Journal of the Combustion Society of Japan」に名称変更しました。特に、論文誌としての充実は重要であり、そのため

梅村章委員長を中心として環太平洋の著名な研究者を委員とする論文審査委員会を新たに発足し、従来の編集委員会は学会誌編集委員会として一般記事の編集と学会誌発行業務に専念することにいたしました。これにより原著論文の査読過程が厳密なものとなり、論文の質を高く維持することが可能になりました。巻号の付与法は議論がありましたが、歴史ある「燃焼研究」の歩みを踏まえて、「燃焼研究」創刊号を第1巻第1号として各年1巻および通号を与え、継続性を維持しました。また、編集作業にインターネットを積極的に取り入れ、論文の電子投稿も可能としました。これらの改革方針は理事会の議を経て承認され、さらに、学会誌編集委員会規程、論文審査委員会規程、投稿規定などの諸規則も併せて整備し、2002年2月号より、いよいよ新しい学会誌として発行が開始されました。表紙デザインや記事、原著論文の基本書式は苦労したところですが、瀬川大資委員の技術とセンスによるところが大きかったと言えます。また、全面的な変更であったため、印刷所である土倉事務所にも多大な協力をいただきました。

現在、石塚悟編集委員長の下で掲載記事に更なる工夫が加えられ、内容は益々充実してきています。日本燃焼学会会員が関わる分野は広く、新しい学会誌から多くの刺激を受けることができます。また、論文誌としての役割も重要で、Citation Indexへの収録は今後の課題としてありましよう。会員であることのメリットが感じられる学会誌としてさらに発展することを願っています。